

醸造用ブドウ畑を「登録」

甲州市が進める認証制度の特徴は、あくまで原料となるブドウのトレーサビリティ※1を徹底することにあります。

2018年に認証制度の総合的な見直しを行い、より正確なブドウ栽培地の把握に努めるため畑を登録し、市が畑のデータを一元的に管理していくこととしました。

畑の登録を原産地呼称が参照する仕組みを導入することで、原産地呼称の基礎ができます。

※1 トレーサビリティとは食品の安全性を確保するため栽培から加工、製造、流通までを明確にすること。



<http://www.koshucity-kac.net/>

KATSUNUMA



勝沼地域(勝沼、等々力、深沢)

生食・醸造問わず甲州種ブドウが集団的に栽培され、標高約300～550mの間に位置し、等々力、勝沼、深沢の3つの大字地から構成されています。畑の形状は平坦地と傾斜地とはっきりと分かれており、砂質土は少なく、火山灰土壌(ノブイ)が主であります。国宝・大善寺付近の南西向けの高台に位置する畑(小字名である道上、鳥居平など)は、日照時間が長く、条件が良いとも言われています。

IWAI



祝(岩崎)地域(下岩崎、上岩崎、藤井)

祝(岩崎)地域は、勝沼地区の南部に標高約300～550mの間に位置し、下岩崎、上岩崎、藤井と3つの大字地から構成されます。甲州種ブドウ発祥の地として名高く、集団的に栽培されています。畑の形状は、平坦地と傾斜地とに分かれており、北から北西斜面で、主要河川である日川(にっかわ)沿いの畑は砂質土が主ですが、大半は粘質土となります。また、ワイナリーの集中度が12社と高いのが特徴です。

SHINONOME



東雲(しのめ)地域(小佐手、休息、綿塚、山)

東雲地域は、勝沼地区の北部に標高約300～400mの間に位置し、小佐手、休息、綿塚、山と4つの大字地から構成され、ブドウと桃の栽培が半々と特異な地域構成となっています。甲州種ブドウを栽培する農家が多く、そのなかでフリー樹が多いのが特徴と言えます。畑の形状は平坦地が多く、土質は粘質土が主です。日本で初めて甲州種ブドウをシュールリー製法で醸造した本格辛口ワインの原料生産地です。

HISHIYAMA



菱山地域(菱山、中原)

菱山地域は、勝沼地区の北東部に標高約400～600mの間に位置し、菱山、中原の2つの大字地から構成されます。勝沼地区中で最も標高が高く、寒暖差が大きいのが特徴です。土質は、粘質土で、畑の形状は傾斜地が大半を占めますが急斜地も比較的多く、西から南西向けの斜面で土地の排水性に優れます。ブドウづくりに従事している割合が最も多く「菱山」と地名を冠したワインも商品化されており、その中には土地の個性を感じさせるワインも産出されています。



Area property

ENZAN



塩山地区(千野、玉宮、奥野田、松里)

塩山地区は甲府盆地の北東部に位置し、主に千野、玉宮、奥野田、松里地域にブドウ畑が点在します。ブドウ以外に桃やスモモ、柿といった果樹栽培が盛んな地区です。土質は、地方のある砂土に粘土が混ざります。標高は約400～600mの間に位置し、斜面の向きは多様。畑の形状は、緩やかな傾斜地が主で急斜地も比較的多く、勝沼地区とは違う形状であるため、出来上がるワインのアロマや味わいに明確な違いが見られると言われています。

YAMATO



大和地区(共和)

大和地区は、勝沼の大善寺から大和の景德院の間に位置する大和町共和地域において面積は少ないが主に甲州種ブドウが栽培されています。山と山に挟まれるV字谷に類似した地形で、緩やかな傾斜地に畑が連なります。土質は粘質土が中心。標高は約450～500mの間で、栽培される甲州種ブドウの多くはワイン用に用いられます。同地区産ブドウが単独で仕込まれることはありませんが、貴重な甲州種ブドウの栽培地です。

NIKKAWA



日川(にっかわ)

勝沼という地域柄、右岸、左岸域ともブドウ畑が連続と続いています。右岸は勝沼町勝沼と等々力地域、左岸は勝沼町下岩崎、上岩崎地域となります。砂利交じりの砂地土壌が多く、水捌けは良いが、乾燥に弱い側面を持ちます。河川沿いは甲州種ブドウの畑が少なく、生食用の大房系ブドウの畑が目につきます。

OMOGAWA



重川(おもがわ)

塩山南部を流れる全長約18キロの一級河川。勝沼の日川の構造とは異なり、ブドウ畑と併せ桃、スモモなどの果樹園が右岸、左岸域ともほぼ均一に広がっているのが特徴と言えます。

甲州市の

エリア特性。